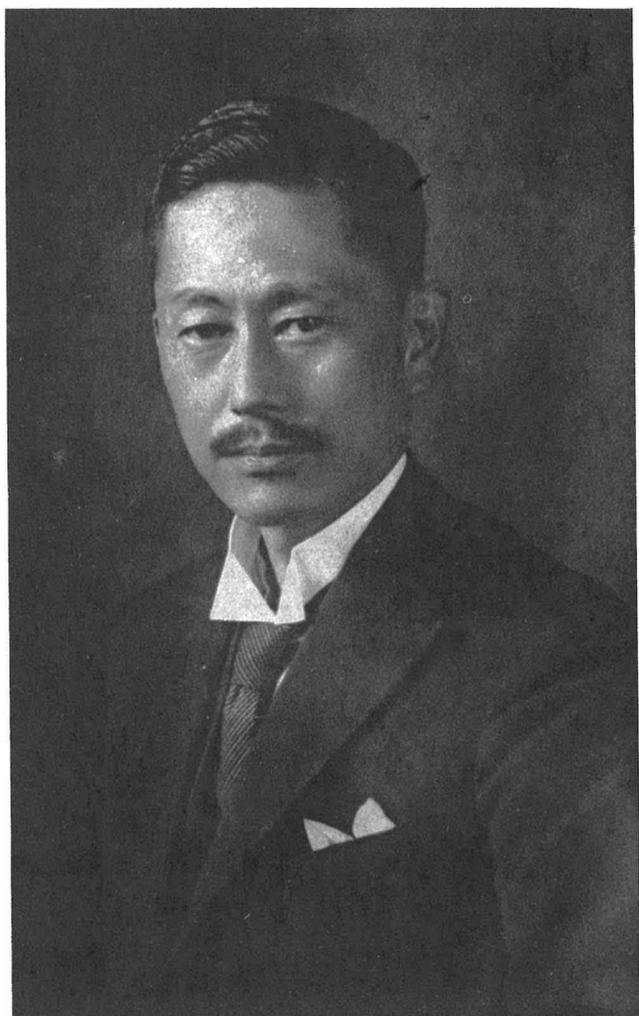


故評議員三浦周行君肖像



價値等の究明を後にせるの感あるは、前記著者の目的に添はぬが如く考へられる。蓋し書肆の需要による限られたる紙數の然らしめたるか。(三省堂發行、定價壹圓八拾錢)

●佛蘭西史

高市慶雄著

混沌たるゲルマン民族大移動の渦中にあつて先づ國家生活の規範を確立したフランス、ローマ風・ゲルマン風新社會の培養基礎となつたシャル大帝の統一國家の中軸となつたフランス、中世の最大社會運動たる十字軍のリーダーとなつたフランス、近代的統一國家構成の魁となつたフランス、近世に於て外交の指導的地位に立つたフランス、——眞にフランスこそ西洋史上何れの國にもまして波瀾重疊、變化曲折の歴史を體驗して來た國である。著者はこの波瀾を極めたフランスの歴史を、その古代住民の風貌の叙述に筆を起し、十九世のフランス文化を描寫して擱筆して居る。二一四頁の紙數を以て、一筋の流の如く統一ある佛蘭西史を展開して居る。本書が卷末に佛蘭西史年表、佛蘭西史參考文獻、佛蘭西王室系譜、

佛蘭西史地名稱呼對照表、索引を附して居ることは本書の一特色であつて、佛蘭西史研究に便する所尠しとしない。(三省堂發行、定價壹圓五拾錢)(以上井上)

彙報

●本會評議員

三浦周行博士訃

本會評議員、京都帝國大學名譽教授、從三位勳二等、文學博士三浦周行氏は、昭和六年九月六日午後五時五十分、病革まり溘焉として薨去せらる。哀痛云ふところを知らず。博士は明治四年六月四日を以て島根縣八束郡竹矢村大字竹矢五十一番地に生まる。幼にして穎悟、その性常人に似ず、祭禮等に父母より賜ふ金を割きて軍談の書を購入ひ耽讀し、その書積んで等身に及べりといふ。後年博士の旺盛なる讀書、蒐集性は既に此時に崩せるなり。年長じて島根縣尋常中學校、私立東京英和學校を経て帝國大學文科大學選科に學び、明治廿六年六月その業

を卒ふ。此頃、水戸の大日本史編纂を完結せられし栗田寛博士の塾に在りて日夜博士に親炙してその學風に習ひよく水戸史學の精神を繼承せられたりといふ。明治廿八年四月史料編纂助員、同卅二年史料編纂員を拜命し、次で同卅八年史料編纂官に任ぜられ、専ら大日本史料の第四編鎌倉時代の編纂に従はれ、精勵恪勤、遂にその編を完結せしむ。大日本史料各編の中、最も早く完了せるものなり。其間明治卅四年、東京帝國大學に於ける法制類聚の編纂を囑託せられ、次で國學院に日本法制史を講じ翌卅五年東京帝國大學法科大學授業擔當を囑託せらる。これ博士の日本法制史研究の基礎をなせり。明治四十年八月京都帝國大學文科大學に史學科の開講せらるゝやその講師として來任し、同四十二年教授に任ぜられ、國史學第二講座を擔任し、爾來、大學にては主として日本中世史及び古文書學等を講じ、また同大學國史研究室の開設に際し、故内田銀藏博士と共にその施設、整理に務め内田博士逝去の後はその内容の充實に力を盡せり。今日其室架藏の古文書記録類の蒐集が學界に重きをなせるは

博士の努力に依るところ最も多し。大正十三年三月臨時御歴代史實考查委員會委員仰付けられ、同十五年十月には、その功勞により旭日中綬章を賜はり、昭和三年新年の宮中御講書始の儀に國書進講の控たるを仰付けられ、翌四年御講書始には國書進講仰付けられしも、偶々宮中喪にあたりて御取止となり、翌五年一月には、進講の榮を擔へり。尙京都帝國大學にては法學部、經濟學部の授業擔當を命ぜられし事あり、其外朝鮮半島史編纂に關する事務を囑託せられて敷度渡鮮し、貴重なる資料を發見して斯學に裨益する所多く、或は屢々高等試験臨時委員仰付けられし事あり。又大正十一年四月命を受けて歐米各國に遊び、各國碩學と交り、各地の古文館を訪ひて歸朝し、昭和五年十月、外務省より簡派せられて支那に遊び、廣東、南京、北平に於て明治維新史、日本法制史を講じ、國史の發展とその意義を説かる。尙近年には文部省、内務省より依囑せられ混亂期に於ける國民思想の善導、社會教化の事業に東西奔走寧日なく、その旺盛なる活動は萬人の驚嘆するところなりき。昭和六年六月四日遠

曆により任を辭せられしが、天朝その在任中の功を思召され、帝國大學令第十三條に依り勅旨を以て京都帝國大學名譽教授の名稱を授けらる。博士はその性、精勵恪勤勉勵止まずして天稟英才を琢磨せられしが、その學は、博宏、史學攻究にあたりて、史料を縱横に驅使し、よく考證精細、而もたゞ博識たるにあらずしてよく時代の真相を究むるを志す。日本史の濫密に於ては、廣く歴史の全般にあるも、其間自ら得意とせらるゝところあり。その一には鎌倉時代史あり。曩に史料編纂員として鎌倉時代の史料の編纂に従はれ、その博搜の資料と深遠の才識によりて東京帝國大學文科大學講師として鎌倉時代史を講ぜられしことあり、早稻田大學出版部刊行の「大日本時代史」の中鎌倉時代の一編は博士の筆に係るところ、今日鎌倉時代を説くもの多く此書に依據する亦宜なりと云ふべし。二には日本法制史研究あり、曩に東京帝國大學に於て法制類聚編纂の事に従ひ、同大學、及び國學院に於て日本法制史を講ぜられしが、これ學生の大業たる日本法制史研究の基礎をなせり。其等業績は收めて「法

制史の研究」「續法制史の研究」にあり、共に我國古法制に關係ある史料を廣く求め、國民生活との關聯を常に顧つゝ、法制の發達、變遷、その精神を攻究せるもの、斯學發達の上に貢獻するところ多大にして、前者はさきに帝國學士院がその功績に對して授賞せるものなり。

其他博士の研究は、「日本史の研究」「日本史の研究第二輯」ありて、その龐大なる著作は博士の深大なる學殖と絶倫の精力を示せるものなり。又大正十三年一月、堺市に於ては、今上陛下の皇太子に御座せし時の御成婚紀念として、堺市史編纂を計畫するや、博士は監修として全般に互り指導し、昭和六年三月、堺市史は八卷を以て完成したるが同書が地方史として新機軸に富み既刊書中出色のものたるを得しは、偏に博士の力に負ふところなり。尙近年は明治維新史研究に従事せられ、内外史料蒐集に力を致せしが、昭和五年十二月中華民國に至り、中山、嶺南、兩大學に明治維新史に關する講演をなし、翌六年三月再渡して北平其他に於て亦講ずるところあり。新興民國人に多大の感銘を與へしは世の多く知れる

ところとす。

博士は身を持する事謹厳にして人を待つに眞摯、而も學術に關しては如何なる妥協をも許されず、學生を指導するに熱心身を以てせられしかば、その門下英才輩出してよくその學統を傳へ、京大國史科の譽鬱然として聞ゆ明治四十三年讀史會を創立して學生の研究機關とし、昭和五年十二月滿二十周年となるや、紀念事業として資金を募りて大學に寄せ、永く國史研究學生に補助たらしむ。又本會史學研究會にては、もと史學研究會講演集ありしを定期刊行の「史林」たらしめんと謀り、自ら編纂の責に任じ、爾來十數年、よくその業を遂けて本誌をして斯界の指南たらしむるもの、博士の功多し。

博士は日來身體の強健を誇られ、その精勵の資を以て事大小となく親しく見、一事をも忽にせず、萬事經營せられ、學術研究、學生指導、社會教化に盡瘁せられしは萬人の等しく畏敬せしところ、近年や、健康の勝れざりしも、博士は何等意に介せざる如く、夙夜勉勵、一日もその業を廢せられず、遂に六月三日滿壽の前日に至るま

で學生を指導し、その老を告げて乞休するの歸途、病院に赴き診察を求められしに、胃部に疾患ありとせられ、靜養を勧められしも起居平常と異るなく、たゞ恢復の速なることを期して七月二日京都大學附屬醫院に入院、加療に力められ、其後症狀輕易となり、八月初旬には歩行を許さるるまでに至りしも同月十四日俄然として急變し、九月四日危篤に陥り、同六日午後五時五十分遂に長逝せらる。享年六十有一、翌七日夜密葬の儀を行ふ。

薨去の報天朝に達するや、畏くも生前の功勞を思召され、勅使を差遣せられ、靈前に幣帛並に祭菜料を下賜せられたり。九月十日午後一時より寺町天寧寺に於て終焉の儀を執行す。京都帝國大學文學部職員有志、京都帝國大學文學部學友會、史學研究會、受業生一同、讀史會、史料編纂所職員、東北帝國大學法文學部教官有志、臺北帝國大學文政學部教官有志、大阪中央放送局、堺市、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社、島根縣友會、大谷大學國史研究會、山田近之助氏、和田彌三郎氏、青地重夫氏等より供へられたる約五十基の立花、花環は式場を埋めて莊嚴を

添へ、香煙立ちこめて英靈を守る。導師の秉炬、讀經の

祭詞

後京都帝國大學文學部長濱田耕作博士の祭詞、東京帝國大學文學部長代理黑板勝美博士、大谷大學々長上杉文秀師、堺市長森本仁平氏、受業生總代清原貞雄博士の弔詞あり、喪主潤氏以下遺族親戚の燒香について京都帝國大學總長新城新藏博士、京都帝國大學文學部總代濱田部長東京帝國大學、同史料編纂所總代黑板勝美博士、大谷大學總代重永潛氏、國學院大學教授總代植木直一郎氏、神宮皇學館總代佐藤虎雄氏、京都帝國大學史學研究會總代羽田亨博士、東京帝國大學史學會總代黑板勝美博士、島根縣人會總代池田松五郎氏、受業生總代學生日置彌三郎杉岡憲一の燒香禮拜あり、引繼き午後二時より一般知友の告別式に移る。會葬者無慮六百名香を焚きて博士の靈永久に安かれと祈れり。斯くて文恪院嵩山周行居士の英靈は安らけく華藏の寶宮へ首途せられたるなり。謹み記して博士の薨去を悼む。濱田文學部長、京都帝國大學文學部史學科受業生總代清原貞雄氏の捧けたる弔詞は左の如し。〔西田・藤記〕

京都帝國大學文學部長濱田耕作謹ミテ故京都帝國大學名譽教授文學博士三浦周行君ノ懿ヲ祭り且之ニ告ゲテ曰ク君聰敏ノ資ヲ以テ夙ニ業ヲ東京帝國大學ニ修メ、後職ヲ史局ニ奉ジ、明治四十年本學ニ來任シ爾來國史ノ講席ヲ主ルコト凡二十有七年、國史ヲシテ學術の基礎ノ上ニ樹立セシメシモノ君ノ力ニ負フトコロ渺シトナサズ、今夏滿ヲ辭シテ乞休シ、一旦病ヲ獲テ遂ニ起タズ、歎悼至切極マルトコロヲ知ラズ、茲ニ學部ヲ代表シテ敬ミテ哀奠ノ禮ヲ致ス、靈ヤ知ルアラバ斯ノ衷情ヲ鑒ミヨ

昭和六年九月十日

京都帝國大學文學部長 濱田耕作

弔辭

故文學博士三浦周行先生、その深遠該博なる學識を以て京都帝國大學史學科の基礎を確立せられ、爾來學生の教導に力を盡し給ふこと二十餘年、功成り名遂けて公職を退き給ひ其後靜かに餘生を樂むと共に、其蘊蓄を傾けて益々學界を益し我が帝國の文化に光彩を添へ給はんと

故三浦周行博士略歴

し、その壯なる意氣を先生御口づから吾等に漏らされた事は吾等門生をして感激措く能はざらしめた所でありま
す、然るに今春來重き病に冒され給ひ、先生からその壯
圖を承つて後僅に數ヶ月、今突如として此の悲に接しよ
うとは吾等の夢にも思はなかつた所であります

數十年來殆んど不眠不休の努力を續けられた先生は、實
に日本帝國のため京都大學のため御一身を捧げられたや
うなものであります、吾等門生は今世に亡き先生に對し
てその宏恩に報ふる方法がありません、只國家のために
御一身を捧げられた先生の御精神だけは是非共嗣ぎたい
と願つて居ります、先生の不斷の御努力に對して其の十
が一を真似る事も到底吾等には出來ませんが、せめてそ
の心持だけは懷いて、身を以て示して下された先生の教
に添ふやうに努めたいと思ひます、先生在天の英靈、吾
等門生の此の覺悟を聞かれ莞爾として微笑して下さるな
らば、吾等は之を以て悲の中の慰めと致します

昭和六年九月十日

受業生總代 清原貞雄

明治四年六月四日 誕生

同 廿六年六月 帝國大學文科大學國史科修業

同 廿八年二月二日 當館(帝國博物館)歴史部列品取調及管理事務を囑託す

同 年四月八日 史料編纂助員を命ず

同 年同月十五日 依願歴史部列品取調及管理事務囑託を
解く

同 廿七年七月十五日 本年賜暇中歸省の序を以て出雲國杵築
家北島二家所藏古文書の取調を命ず

同 廿三年四月一日 史料編纂員を命ず

同 廿四年二月五日 東京帝國大學法科大學に於ける法制類
聚編纂を囑託す

同 年三月五日 東京府私立國學院法制科教員たること
を認可す

同 廿五年十月廿五日 東京帝國大學法科大學に於ける法制類
聚編纂囑託を解き更に東京帝國大學法
科大學授業を囑託す

同 廿六年三月十四日 東京帝國大學文科大學講師を囑託す

同 年四月廿三日 依願東京帝國大學法科大學授業囑託を
解く

同 廿七年五月廿八日 史料蒐集の爲め青森縣下へ史蹟踏査の

爲め、福島、宮城、岩手の三縣下へ出張を命ず

同 年七月十一日 東京帝國大學文科大學講師の囑託を解

く

同 年同月十三日 明治三十八年七月十日まで東京帝國大

學文科大學講師を囑託す

同 卅八年四月一日 任史料編纂官、敍高等官六等

同 年五月廿九日 史料編纂上取調の爲め神奈川縣下鎌倉

へ出張を命ず

同 年六月卅日 叙正七位

同 年七月十一日 明治三十九年七月十日まで東京帝國大

學文科大學講師を囑託す

同 年九月十五日 史料蒐集の爲め京都府、奈良縣下へ出

張を命ず

同 卅九年七月十一日 明治四十年七月十日まで東京帝國大學

文科大學講師を囑託す

同 年十二月三日 講師囑託の期限を解除す

同 四十年五月十日 (京都帝國大學) 國史材料蒐集を囑託す

同 年八月十二日 依願免本官

同 年同月同日 國史材料蒐集の囑託を解く

同 年同月同日 京都帝國大學文科大學國史學講師を囑

託す

同 年同月十六日 依願東京帝國大學文科大學講師囑託を

解く

同 年同月同日 史料編纂補助を囑託す

同 同四十二年五月廿五日 任京都帝國大學文科大學教授

同 年同月同日 叙高等官五等

同 年同月同日 國史學第二講座擔任を命ず

同 年七月二十日 叙從六位

同 年十月十八日 文學博士(論文提出)

同 同四十四年六月廿四日 陞叙高等官四等

同 年九月廿日 叙正六位

大正二年七月十一日 陞叙高等官三等

同 年九月廿日 叙從五位

同 四年三月十二日 京都に關する學生修學旅行案内の取調

を囑託す

同 年四月廿四日 御大典賀表裝飾に關する取調委員を囑

託す

同 年八月卅一日 本學法科大學法制史授業擔當

同 五年二月七日 立太子式賀表裝飾に關する取調委員を

囑託す

同 年二月十八日 朝鮮半島史編纂に關する事務を囑託す

同 年七月廿九日 陞叙高等官二等

同 年八月卅日 叙正五位

同 七年十二月廿七日 叙勳四等授瑞寶章

同 八年三月廿四日 東宮御成年式賀表並賀箋裝飾に關する

同	年四月一日	取調委員を囑託す	同	年十二月廿八日	叙勳二等授瑞寶章
同	年四月一日	官制改正に付辭令を用ひず京都帝國大學教授に移り文學部勤務となる	同	年同月同日	明年講書始の儀に圖書進講被仰付(宮中喪に付取止)
大正十年五月十日	本學經濟學部授業擔當を命ず	同	同	四年六月十九日	高等試験臨時委員被仰付
同	年八月十五日	陸叙高等官一等	同	年十二月十八日	明年講書始の儀に圖書進講被仰付
同	年九月廿日	叙從四位	同	五年一月廿五日	高等試験臨時委員被免
同	年十一月廿九日	(佛教大學)講師を囑託す	同	年五月十六日	高等試験臨時委員被仰付
同	年十一月卅日	叙勳三等授瑞寶章	同	年十月十三日	支那へ出張を命ず
同	十一年四月一日	歐米各國へ出張被仰付	同	年十二月五日	出發
同	年五月七日	京都發	同	六年一月廿一日	高等試験臨時委員被免
同	年十二月廿五日	歸朝	同	年二月十八日	歸朝
同	十二年三月卅一日	經濟學部日本經濟史授業擔當を解く	同	年五月廿九日	高等試験臨時委員被仰付
同	十三年三月八日	臨時御歴代史實考查委員會委員被仰付	同	年七月十五日	依願免本官
同	十五年三月卅一日	本學法學部法制史授業擔當を免す	同	年同月十七日	高等試験臨時委員被仰付勅任官を以て待遇せらる
同	年十月廿八日	臨時御歴代史實考查委員會委員の職を奉し盡力勤からず依て旭日中綬章を賜ふ	同	年同月廿日	帝國大學令第十三條に依り勅旨を以て京都帝國大學名譽教授の名稱を授く
同	年十月廿八日	授旭日中綬章	同	年同月卅一日	敘從三位
同	年十一月一日	叙正四位			
昭和二年十二月廿二日	昭和三年一月講書始の儀に圖書進講扣被仰付				
同	三年十一月廿四日	昭和三年勅令第百八十八號の旨に依り大禮記念章を授與せらる			

●明治史研究會

第十五回例會 四月二十八日午後六時半より樂友會館にて開催、三浦、牧兩教授以下二十一名出席、左の講演

あり十時散會。

- 一、明治初年の文明論に就いて 時野谷 勝君
- 一、中華民國の明治維新史研究熱に就いて 三浦 周行君

第十六回例会 五月二十七日午後六時半より樂友會館

にて開催、三浦教授以下十七名出席、左の講演ありて十時散會。

- 一、明治陸軍の建設と發達 林部 與吉君
 - 一、明治初期洋學教育の一知見 加藤 竹男君
- 第十七回例会 六月二十三日午後六時半より樂友會館にて開催、牧教授以下出席者十五名左の講演あり十時散會。

- 一、舊幕臣の救済に就いて 山本 正信君
- 一、明治初年の地理學 藤田 元春君

●民俗學研究會

例会 二月四日 學生集會所南室にて午後六時半より

開會。西田教授以下三十三名出席。

- 一、民俗學の基礎に關する二三の問題 池田源太氏

一、蒙古民族の季節的移動とその生活に及ぶ影響

- 一、オリンピヤの競技 水野 清一氏
- 原 隨園氏

相談會 三月十五日 學友會館六號室に於て。西田教授外十三氏、決定事項。

肥後氏探訪組織につき詳細説明あり。三班に分つて調査をなし探訪することに可決す。

第一班(北部方面)杉岡、勝谷、水野、森、三宅諸氏

第二班(南部方面)山根肥後氏等。

第三班(西部方面)井上、池田、岸本の諸氏がうけもつ

ことに決す尙探訪用紙調製の件につき決議す。

例会 五月四日 學生集會所南室にて午後六時半開會

西田教授以下四十二名出席。

- 一、タケミナカタの神について 肥後 和男氏
- 一、英國の巫女について 半澤儀一郎氏

一、民俗學について 西田直二郎氏

柳田國男氏歡迎會 五月十一日午後五時より樂友會館

にて開催、九州地方旅行歸途の氏を擁して歡迎會を開き

席上「郷土研究の近況につき」の講話あり後ち別室にて西田教授外二十二名晚餐を共にしついで休憩室にて柳田氏を中心として座談を試み夜の更くるを覺えなかつた。

大會 六月六日 樂友會館大講堂にて。午後一時間會。

一、開會の辭

幹事 木村 武夫氏

一、民畫の性質

柳 宗悅氏

一、臺灣の民俗 大阪外國語學校教授 淺井 惠倫氏

一、雷鳴と桑樹(落雷と桑原)

本學教授 新村 博士

一、閉會の辭

幹事 大橋 克郎氏

尙當日會場には國史陳列室所藏の各地民俗學的資料その中主なるものはジャバ採集影繪操人形(ツーヤン)及び臺灣土人袖無衣、冑、木裝舟、又アイヌ熊祭用具、日本各地の信仰關係の玩具類など無慮數百點)を陳列し、兼ねて同日録及一部のエハガキを頒布した。又淺井氏蒐集の臺灣番人に關する資料及び明石國助氏蒐集にかゝる徳川時代與女中の髮飾等の展覽もあり、聽衆約三百名、仲々の

盛會であつた。講演終了後、晚餐會を行ひ、本日の講師を始め西田教授以下十三名參會。十時半終了す。

例會 七月九日午後七時半より百萬遍かぎや樓上に於て開催。當夜雷雨すさまじかりけるが會するもの二十五名。講演左の如し。

一、チキナガタラシヒメの話

手東 弘保氏

一、星降りの井と鏡の水

井上 頼壽氏

一、民俗學と社會學との關係

本田喜代治氏

會 報

會 員 動 靜

● 入 會

東京市本所區厩橋二丁目二ノ三

玉川 公也氏

東京府荏原郡目黒町下目黒九七四

松本 芳夫氏

神戸市平野上祇園町一〇三、土岐方

柴山 英一氏

右紹介

島田 貞彦氏

●退 會

羽倉信一郎氏

●死 亡

三浦 周行氏

橋川 正氏

武岡 豊太氏

黒上正一郎氏

右謹んで哀悼の意を表す。

●寄贈交換圖書

更訂國史の研究、總説(黒板勝美著)

岩波 書店

列國史叢書 希臘史(村川堅固著)

三省 堂

同 佛蘭西史(高市慶雄著)

森野舊樂園小誌

森野舊樂園保存會

人類學雜誌 四六の八附録四六の六、七、八、九

東京人類學會

史蹟名勝天然紀念物 六の六、七、八、九

同保存協會

史學雜誌 四二の六、七、八、九

史 學 會

歷史地理 五七の六、五八の一、二、三

日本歷史地理學會

史苑 六の二、三、四、五 立教大學史學會

考古學雜誌 二二の六、七、八、九 考古學會

商業と經濟 十二年第一冊 長崎高等商業學校研究館

民俗學 三の六、七、八、九 民俗學會

季刊社會學第一輯公民科の問題 日本社會學會

眞宗學報 八 眞宗專門學校

龍谷史壇 八 龍谷大學史學會

國學院雜誌 三七の七、八、九 國學院大學

經濟論叢 三三の一、二、三 京大經濟學會

史迹と美術 八、九、一〇 史迹美術同攷會

史 潮 一の二 大塚史學會

史 學 一〇の二 三田史學會

言語と文學 六 臺北國語國文學會

北方郷土 二の三 函師郷土研究會

南方土俗 一の二 臺北大學南方土俗學會

東洋學報 一九の二 東洋協會學術調查部